櫓下豐竹古靱大夫の放送

昭和十九年五月十九日櫓下古靱師は文樂座同師の部屋より左の如く放送せり、蓋し淨瑠璃界空前の事なるべし、本誌は古靱櫓下が淨瑠璃に對する平素の心掛け、調査研究に如何程力を盡くし、精神則ち其の氣構へを傳へて世の研究者並に趣味者の模範に供したく之れを速記して茲に載載す、本記事に對する責任は本誌記者が全部を負擔します。

國性爺合戰と日本の母　古靱大夫

私は以前に、或る學者の方から、こんなお話を、承つた事が有ります、鹿兒島の或る島の湊へ、親子の鯨が逃げ込んで來ました、夫を捕らうと、皆が騒ぎ立ますと、母鯨は子を捕られまいと、體の下へ隱くしましたが、夫でも終に子鯨は、捕られて殺されました、サア母鯨は急に暴れ出して、そこらの船を毀して、外海へ逃げ去りました、夫から幾日も幾日も子を殺された時刻に、湊の口に來ては、悲しさうに泣いたり身體を高く立てゝ、子供を戻せと云はぬ計りに訴へたと云ふ事であります、聞いた丈けでも、此母の愛の强烈さに、涙ぐましくなつたので御座います、今度の大東亞戰爭に成りまして以來、忠勇な軍人精神がいよ〳〵益々、發揮されるに從ひまして、自然と、日本の母、と云ふ聲がしきりに聞へて參つたので有ります、此母ありて此子有りと申します如く、忠勇類ひない軍人の皆樣のお强いのは、一つは其のお母樣の、優れた魂の感化が大いにあづかつて、力ありと申す事が、ハツキリと判つて來たので有ります。少しも、僞り飾りのない、眞劍な母親の愛が、知らず不識の間に、子供達の心に感化を與へて、こうした立派な軍人を、育て上げたと申すので有ます、例の市太郎ヤアイ、のお母さんは、餘りにも有名で有りますが、是に類する美談は、この頃段々と多く私共の耳にするやうになつて參りました、、烈しい戰爭で、いよ〳〵最後

の一瞬といふ時、天皇陛下萬歳、と叫ばれますさうですが、次いで、お母さん、と云つて絶命されると申す事を承ります是は死ぬる、今端の際迄も心にしみ込んだ、母親の慈悲心に對しまして、忘れられぬ感謝のお禮心でありませう。

そして此時、お母さん、とは云はれますが、お父さん、とは云つて貰へない樣です、此の點男親は、少々テレ氣味では御座いますが、つまり、是程母性愛は强くて深いものがあるのであります、私共が、日常床に掛て語ります淨瑠璃の中にも母親が子に對しての、深い愛情を書いた物が、中々澤山に御座います、彼の阿波の鳴門のお弓、戀女房の重の井の子別れ物、先代萩の政岡の樣な烈女でも、また、和田合戰の板額の如き女丈夫でも、子供には他愛もない、お母さんに過ぎません、又一の谷の熊谷の女房相模でも、一子小治郎の初陣を案じて、一里いつたら樣子が知れよか、五里來たら便りがあるかと、百里の道をばつい都迄、やつて參るので有ります、菅原の松王の妻千代が、死んだ子の美しう生れて來て、疱瘡迄無事に濟んだのは、果報か因果かと歎きますのも、皆子を思ふ母の心であります、夫れが又義理の中の子や、繼子に對する母親になりますと、一層深刻でありまして、忠臣藏の九段目の戸奈瀬は、先妻の子の小浪を庇ひますのに、自分の一命を投げ出して居ります、又双蝶々引窓で、長五郎の母親は、ほんの子、繼子の中に立つて、恩愛義理の柵に、なやみぬくのであります、こんな風に、子供の爲には身も命も拋つて、惜しいとは思はぬので御座います、勿論、子を愛すると申す事は、日本に限らず、世界通有の人情では有りませうが、併し、最後の場合には命を捨てゝも厭はぬと云ふ。

此死を覺悟しての慈愛は、全く體當りの決心で、金輪際子供を可愛がる母と云ふのは、獨り日本の母のみが持つ、誇るべき特質であります、武士道とは、所詮死ぬ事で有ると云はれますが、日本の母性愛も亦、死を眼中に置かないと申すのが、著るしい特色ではないかと思ひます、是は米英などの、道義心に缺けた國には、決して見られぬ所で有りまして、武士道が死を背景にしまして、初めて光る樣に、日本の母の愛もいざと云へば、かる〳〵と子の爲に命をやるといふ所に、其の特色があるのではないかと考へるので有ります。私は只今、此お噺を文樂座の自分の部屋から、申上げて居るので有りますが當五月興行で私の語物は、國性爺合戰三段目獅子ケ城の段で御座いまして、此の段に大近松先生の最も力を込められました日本の母が登場致すので有ります。此の國性爺合戰は御存じの通り、日本と外國との戰爭を淨瑠璃に仕組みました、最初の眞に珍らしい名作でありまして、日本肥前の國平戸で生れた、和藤内と云ふ漁師の子が、唐土に渡り後に、國性爺鄭成公と成ります。此の國性爺が大明國を助けて戰ひ、日本の偉らさ、日本人の義理人情に厚い事、正義の戰ひに强い事な

どを描き、到る所に、日本のお國自慢や、日本男子は勿論、日本の婦人のガツシリとした特質を、殊に念入りに書いて居るので有ります、眞に痛快な、日本人向の淨瑠璃で御座います。夫れに此の時の興行は大變な好評で、三ケ年に亘り、十七ケ月間引き續いて大入滿員、當時大阪の人口は三十萬と稱されて居りましたさうですが、其の七割に當る、二十餘萬人の見物を吸收しました、是も世界の演劇史に例を見ない、記錄で有ると申すことを伺ひました事が有りました。扨この獅子ケ城は、唐土韃靼國の大將、五常軍甘輝の城廓で、爰へ日本から、國性爺の和藤内が、韃靼の爲に亡ぼされた大明國を助けて、再興の旗上げをするに附いて、敵の大將甘輝を味方に引入れるため、和藤内の父老一官と母親と三人連れで便つて參ります、夫には、こんな譯が有ります。和藤内の父老一官は唐土の生れで大明國に仕へましたが、諫言して用ひられず、夫れで日本に來て、日本人の妻を迎へ、和藤内をもふけたのですが、其の老一官には唐土に遺した、一人の娘が有りまして、母の死後出世して今は、此の獅子ケ城の城主、甘輝將軍の妻で、錦祥女と申してをります、老一官は此の娘に便つて夫の甘輝を、息子の和藤内の味方に入れようと企てます。

それで一官の妻が、只一人だけ繩に縛られ乍ら、城内に入る事が許されます、そこで自分には義理の娘に當る、繼子の錦祥女の傳手に寄つて、甘輝に味方を賴むので有ります、甘輝は元來、明の家臣で有つたのですから、快く承知はしましたが只女房の緣に引かされて一戰もせず、おめ〳〵と敵方に味方するは、武將の恥辱であると云ふので、其面目を立てる爲女房を殺した後に味方を仕やうと、錦祥女を刺し殺さうと仕ます、母親は驚いて、極力それを留めようと致します、錦祥女は是迄、親知らずに寂しく暮らして來たのですが、義理の中とは云へ、たつた一人の母親への孝行と云ふので、潔よく討たれようと、夫の劍に身を寄せます、此の孝心深い、健氣な錦祥女の眞心に動かされた母親は、義理の子への恩愛と、一ツには、義理と情けを基とする、日本女性の面目を發揮して、我命を絶つとも繼子は殺させぬと、甘輝の刄の下に身を投出すのです、爰に日本母性の凛とした氣概と、子に對する溫かい、愛情が見えるので御座います。

それが、斯う云ふ風な名文で書かれて居ります、錦祥女縋り付き、一生に親知らずつひに一度の孝行なく、何で恩を送らうぞ、死なせてたべ母上と口說き歎けばわつと泣、ノヲ悲しい事をいふ人や、殊に御身は娑婆と冥土に親三人、殘り二人の父母は產落した大恩有り、中に一人の此の母は憐み掛けず恩もなく、うたてや繼母の名は、けづつてもけづられず、今爰で死なせては、日本の繼母が、三千里隔てたる、唐土の繼子を憎んで、見殺しに殺せしと、我身の恥ばかりかは、遍ねく口々に、日本人は邪見なりと、國の名を引出すは我日の

本の恥ぞかし、唐を照す日影も、日本を照す日影も、光りに二つはなけれども、日の本とは日の始め、仁義五常、情有、慈悲專らの神國に生を享けた、此の母が、娘殺すを見物し、そも生きて居られうか、願くば此繩が、日本の神々の注連繩とあらはれ、我を今に殺し、屍は異國にさらす共、魂は日本に導き給へと聲を上げ、道も有り情も有り、哀れも籠る口說き泣、錦祥女縋り附く、母の袂の諸涙、甘輝も道理に至極して、そゞろ涙に暮れけるが、是から例の、紅流しに成つて、「南無三寶紅が流るゝ」の所となります。

此の場書卸しに語りましたは、竹本座の櫓下、初代竹本政大夫、後に師の遺言に依て、二世竹本義大夫を相續し夫れより竹本上總少掾を受領、又竹本播磨少掾藤原喜敎と、再受領せられし偉大なる師匠、此の師匠の口傳書に「國性爺合戰の出合ひ、國性爺は血氣の男、甘輝は仁寬大度の男なり、其區別大事に語るべし」と敎へてあります、此の兩大將の態度は一段の妙味ある所で、殊に國性爺の母の、しとやかで優しい中にも、男まさりの强さ、嚴しさの有る事を、見のがしてはならぬと思ひます。其の最後に、劍を取つて喉を貫き自害する皆が驚いて騷ぎますと、ア、寄るまい〳〵と制して、ノウ國性爺、母の最期を必ず歎くな、悲しむでない、韃靼王は母の敵である、と思へば討つに力が加はるではないか、氣を緩ませぬ母の慈悲である、此の遺言を忘るゝなと、云ひ遺して國性爺の勇ましい姿を、嬉し相に見上げ見下ろし、滿足して娘錦祥女と共に、死んで行きます、私は、斯うした尊い日本の母の心持ちを、皆樣に知つて戴き度いと、及ばず乍ら心を入れて、日々勤めてをります。

序でに此の母親の事を、記錄に依りて御傳へ申ますと、肥前松浦家の足輕、田川七左衛門の娘となつて居ります、夫は大明國の鄭芝龍、其の中に生れた混血兒國性爺、日本での名は田川福松とあります、和藤內と申す名は、是は、近松先生の書かれた名で、和國にも、唐土にも、こんな英雄はないと申す事から、和藤內と附られたと申す、御噺も聞いた事が御座いました、是は餘談、それから夫や子と共に唐土へ渡つて戰ふ內、父芝龍は變節して、敵に降つたのを、妻は自分計りか、祖國日本の恥辱で有ると歎きて、國性爺と共に踏止つて最後迄戰ひ續け、遂に多くの敵軍に圍まれ乍ら、城の樓に上つて、日本刀で喉を貫き、池に飛込んで壯烈な死を遂げたので有ります。そして日本の女の神々しさ、美しさを、其の國の土に殘したのであります。現に台灣の開山神社には、國性爺と母の田川氏とが、祭られて有ると聞いて居ります、此の逸話が近松門左衛門先生の筆によつて、獅子ケ城に再び現はれて參つたので御座います、斯うした故實を知る事も、語ります私共の心構へに、一ツの據り所が惠まれますので、結構な事だと存じます、また二十二日に何か御噺をさして頂きます、今日は是で失禮……